

*「ポレーシェ」とは チェルノブイリ付近の湖沼低地帯をいう



～南相馬の方たちをお迎えて～

「チェルノブイリ/フクシマ講座」始まりました!!

去る10月27日、ウィルあいちにて「チェルノブイリ/フクシマ講座第1回『南相馬での日々』」と題した交流会を行いました。定員54名の会場に46名の参加者、そしてマスコミ取材もあり、満員御礼の会となりました。

南相馬からのゲスト4名（「放射能測定センター・南相馬」2名、「フロンティア南相馬」2名）には、地震・津波・避難・補償・放射能への不安や今の暮らし、ご家族への思い、そしてこれからについて、様々なことを率直に語っていただきました。皆さん軽妙な語り口で、2時間があっという間でした。その中でも、時折涙に声を詰まらせる場面もあり、日々苦渋の思いで過ごされていることが、ひしひしと伝わってきました。

参加者からの「なかなか被災地までボランティアには行けない。名古屋からどういった支援を望みますか?」という質問に、「南相馬のことを知ってほしい、いつまでも忘れずに覚えていて応援してほしい」と、「フロンティア南相馬」の伊藤さんは答えました。このフクシマ講座では、被災地と市民をしっかりとつないでいく役割を果たさなくてははいけないのだと、強く思いました。そして、交流会の後の懇親会では、「福島万歳!!」



の掛け声が、深夜の居酒屋に響き渡っていました…。(詳しくは、P6～P7を参照してください。)

第2回は、『チェルノブイリから学ぶ被災者支援』です。

チェルノブイリの被災者に対する、チェル救の今までの取り組みや、現地の人たちが自ら行った活動などをご紹介します。

そこには、今後のフクシマ支援のヒントがたくさんあるはず!一緒に考えてみませんか?(市原)

〒466-0064 名古屋市昭和区鶴舞3-8-10 愛知労働文化センター 地下1階

NPO 法人 チェルノブイリ救援・中部

銀行 名：三菱東京UFJ銀行 名古屋営業部 (店番号150)

口座番号：普通 6949211

口座名義：特定非営利活動法人チェルノブイリ救援中部 理事長 神谷 俊尚

郵便振替：00880-7-108610

TEL / Fax : 052-732-7172 (月・水・金 10:00 ~ 17:00)

ホームページ : <http://www.chemobyl-chubu-jp.org>

南相馬便り

(神谷 俊尚)



第4期目の南相馬市全域放射線量測定活動を、10月20日原町区北部、21日鹿島区、11月3日原町区南部、4日小高区と、測定参加のボランティア17名と現地協力ボランティア延べ34名の協力で実施しました。今回から原町区・鹿島区合わせて51地点を追加し、立入不能な山林部分を除き、ほぼ全市が網羅できました。(測定結果、詳細は、p8を参照してください。)

「放射能測定センター・南相馬(とどけ鳥)」は、11月後半に依頼検体数も落ち着きを見せていますが、測定数は延べ2,100を超え、「とどけ鳥が市民に認知されているのかな」と感じています。今秋、きのこ類の測定依頼が70を超えました。5検体が10,000 Bq/Kg(セシウム134、137合計)を超え、一番低いもので123 Bq/Kgと、南相馬市近郊は全滅の状態でした。それに引き換え、根菜類・葉物野菜は、土壌汚染に拘らず、比較的低い数値(20 Bq/Kg以下)のものが多く、安全とは言えないまでも、栽培の工夫で安心な野菜を収穫できる可能性が出てきました。

稲作の試験栽培が、原町区・鹿島区135ヶ所で行われました。とどけ鳥も、農家の協力を得て10ヶ所程の測定を行いました。その結果は、白米で1ヶ所から100 Bq/Kg超え、10~20 Bq/Kgが3検体。それ以外は7 Bq/Kg以下となり、こちらも栽培方法で改善できる可能性が見えてきました。

とどけ鳥では、測定結果を依頼者に手渡ししながら、説明を加えています。「今回安全だからと言って、今後も安全とは限らない。繰り返し測定をし続けて、安全を確認してから食する習慣をつけてください。」今、福島では「もう大丈夫だろう」的な雰囲気が漂いつつあります。この安全論こそが、今後の大きな課題です。県内の多くの市民測定所では、最近急激に検体数がダウンしていると聞いています。この安全論の中に、大きな落とし穴があることを、繰り返し訴え続ける必要性和、測定を継続して行く力を貯めていかなければなりません。

除染は、はかどっていません。先日、市の市民報告会で、除染は9~12ヶ月遅れると発表されました。原町区・鹿島区で、除染時に発生する汚染ガレキ等の「仮置場」が決まらず、各行政区に「仮置場」の要請をし続けていますが、これも決めることが出来ず、一部(全市内計画の2%)でしか実施されていません。また、環境省管理の小高区内でも、田畑の草刈以外、家屋の除染を実施している様子はいかがえません。行政サイドは、「予想外の大震災・津波・原発被害で非常事態……」と発言しますが、実際の仕事は「平常スタイル、通常法令に従い」であり、事態は全然進んでいません。

市民活動は、緊急的な援助活動から未来に向けた動きへと、変化を始めています。「エコ&未来エネルギー協議会南相馬」(通称えこえね)準備会は、ソーラー・風力・バイオエネルギーを南相馬市に導入すべく、動き始めています。チェルノもこの動きに関わり、有機農家の方々とバイオエネルギー部門を進めていく準備に入りました。今年度は試験的ではありますが、既に3ha程に菜種の播種を終わり、来年度からの本格的栽培の準備体制を整えつつあります。またソーラー部門は、助成金も決定し、年明けからソーラーシェアリングの実証実験を、3ヶ所で実施することが決定しました。「えこえね」も、年明けには正式に協議会を立上げ、本格的な活動に入ることを決定しました。

震災以降、閉鎖されていた屋内プールの再開を訴え続けた「NPO法人フロンティア南相馬」の活動により、県からの支援や市議会の決定につながり、再開が決まって復旧工事も終了し、12月中旬に再開します。子ども達や市民がプールで楽しむ姿を、早く見たいものです。

11月19日、福島県は「核燃料税の条例を更新せず廃止する」と発表しました。「県と県議会が県内の全基廃炉を求めていることを踏まえて」と説明、このことにより「福島県は、第1原発5・6号機、第2原発1~4号機の再稼働を認めないことを決めた」と評価することが出来ます。この決定が、原発立地県すべてに広がること、総選挙で脱原発の声が勝利することを期待しています。



<放射能測定センター・南相馬(とどけ鳥) 活動報告(第二回)>

～ 6月の活動スタートからの半年間を振り返って～

(放射能測定センター・南相馬 森田 雄二)

測定時間延 1,000 時間 (2,000 件×30 分) 突破!

<測定件数>

6月1日に再スタートした放射能測定センター・南相馬(とどけ鳥)。ちょうど半年が経ち、測定検体数は2,000を超えました。私たち測定ボランティアは、2,000回この測定器の扉を開け、2,000枚の測定結果をプリントアウトしました。2,000という数字には、依頼された方の思いや意味が1つ1つあります。県外にいる方にもこの思いが少しでも伝えられたらと思い、活動ブログを書いています。(「とどけ鳥」でネット検索してください。最新情報満載です。)

<活動意義>

気軽に市民の方が測定依頼に来られる場所として、「とどけ鳥」は着実に歩んできました。南相馬に測定センターを立ち上げた「チェルノブイリ救援・中部」の取り組みと先見性に、感銘しています。「とどけ鳥」は、南相馬にとっても、県外の人たちにとっても、なくてはならない存在です。逆に、使命の重要度は増しています。測定ボランティアをされていて、「もっとやれることがある!」と思ったりします。しかし、どんどん手をひろげ活動がパンクして消滅してしまうより、この半年で築き上げた「地域の方が、気軽に、たくさん」という「とどけ鳥」の路線を守り、10年、20年と継続していくことが、何より大切なことではないかと思えます。

<測定センターの課題>

測定以外での取り組みでは課題があります。

- とどけ鳥文庫…総貸出数は、いまだに数件しかありません。定着していません。訪れた方の中には「読んでみたい本がたくさんある」と言っていただいた方もいます。声かけが必要です。
- 映画上映会…4本12回(1映画につき3回上映)行いました。毎回参加者はほとんどありません。トータルでも二桁の参加者数に達していません。
- ブログ、ツイッター…広報不足です。ボランティアに来る県外の人には少しずつ広まっています。引き続き拡散が必要です。

<今後の展開>

- ① 個人的にはアンケートを実施したいと思っています。測定に来られた人とともに活動を創り上げる、参加型測定センターです。「放射能下で生きる知識の蓄積」をテーマに掲げているからこそ、アンケート等の実施が必要だと思えます。利用頻度や疑問、質問、お困りごとなどの情報収集。
- ② 放射能測定センターとして、「福島復興・菜の花プロジェクト」と連携し、役割を担っていくこと。
- ③ 個々の土壌・野菜・果物・測定年月日等のデータを一元管理し、傾向を分析できるようにする。

などなど…



<菜の花プロジェクト 種まきに出発!>

シーベルト測定隊 が行く!!

「山側の民家付近に 赤ん坊の泣き声が…」 (原 富男)

11月2日～5日まで、「南相馬市の放射線マップ」作りのための、放射線量測定隊に参加しました。3日は太田地区の山側、4日は小高地区の山側の測定を行いました。山側は、原発から飯館村方向に向かう線上にあり、放射性物質の降下が多く、樹木や葉に付着した放射能が洗われずに残っているため、高い線量でした。



とりわけ今年4月に警戒区域を解除された小高区では、未だ4万人近い住民が避難生活を余儀なくされており、現在も、帰宅は昼間のみに限定されています。この地域の一番高い所では8 μ SV/時を超えました。

この地域は酪農家が多く、測定中に会った酪農家の人は、「あの畑の中には、オウの家の牛が全部埋められている」と話してくれました。別の方の話では、ほとんどの牛は、国の命令により一度麻酔銃で眠らされ、車で運ばれ毒を注射されて殺された」ということでした。測定中、多くの畜舎を見ましたが、大金を投じた畜舎には一頭の牛もおらず、牛舎の拡張工事中に事故が起きたと判断できる農家もありました。また、山側の民家付近で、赤ん坊の泣き声かと思える声が聞こえたので調べてみると、山羊の鳴く声でした。2～3日分の餌を飼い主に与えられているものの、飼い主が来るのを待ち焦がれ、僕らにかまって欲しそうでした。

僕と測定のパアを組んだ岩本さんという地元の方は、親子2代の川魚漁師です。北は仙台から南は「いわき」までの川を歩き、漁をしてきた方ですが、原発事故で川魚はひどく汚染し、捕ることができなくなりました。淀んだ川に住むウナギは5,500 Bq/kg、流れのある川でも1,000～2,000 Bq/kgの放射能が蓄積されています。帰りに庄野川で、鮭の遡上と産卵を見ました。原発事故があろうがなかろうが、毎年遡上する鮭は「すごい!」と思いました。

第9次 南相馬市放射能測定 活動に参加して

(愛知県被災者支援センター事務局長 瀧川 裕康)

私は、阪神淡路大震災以降、防災ボランティア活動をしてきました。戦後、県外避難が発生した災害は、1995年阪神淡路大震災と2000年三宅島噴火災害のみで、今回の大震災が3回目です。私はその経験から、今回は初めから、被災県外に避難された方の支援に携わっています。その視点で、この放射能計測活動に参加しました。11月3日から予定されていた計測実施の前に、私は、福島県から大量に避難している山形県米沢市を、単独で訪問しました。愛知県には、1,250名ほどの方が避難していますが、米沢市だけで3,000名が避難しています。そのほとんどが福島県からで、その理由は放射能から子どもの健康を守るためです。米沢市が運営する「おいで」という支援センターでは、7人の職員のほぼ全員が、福島からの避難者で運営されていました。毎月1,400名の方の来館、電話などの相談に応じているとのこと。被災地に近い所の、避難の緊迫感を感じました。

次に行ったのが、福島市の「市民放射能測定所」で、ここではホールボディカウンター(WBC)を見せてもらいました。愛知県でもWBCを受けたいという避難者の声を聴きますが、全然設備がなく、支援センターとして情けない思いをしてきたから一度見たかったものです。福島県が実施するWBC測定時間は3分間、しかも「結果を数値で教えず、説明もされない」という、とてもお粗末なもの。「市民放射能測定所」では、測定時間は30分間、結果は数値を示し説明もするので、受けた方が納得できます。愛知県でも是非常備したいと思いました。

そして、チェルノブイリの皆さんと合流して、南相馬市での測定。私は、今年の4月に一度参加しましたが、その時は現地で「放射能を感じる」ことが出来たことが収穫でした。「放射能を感じる」とは、先ず計測器の表す数値の変化が見えること。次に高い数値になると、すごい大きな音を発して耳に聞こえること。その結果、何度か計測経験すると、やがて今までは感じなかった放射能の量を、測る前に想像できるようになること。4月の計測ではそのように「放射能を感じる」ことが出来たのが収穫でした。

私にとって、今回第9次の参加での一番大きな収穫は、食事会での玉川さんのお話でした。

被災 → 家族の県外避難 → 帰還 → 子の保養 → 支援と家族の生き様の真剣さ → 国・福島県・東電の非情さ → 測定センターでのボランティア活動へ。この連なる心から絞り出すお話は、参加した者全員の心を釘付けにしました。今後の測定活動にも、このような心に訴えるコースが添付されることをお願いしたい。そうやって、南相馬市民の声を取り入れながら、菜の花プロジェクトが明るい未来を拓くことを期待したいです。

「庭先のブルーシートの下に…」

(測定ボランティア 佐伯 恵子)

前日とは打って変わった秋晴れの朝、名古屋を後にシタ方には放射能測定センター南相馬「とどけ鳥」に到着。センターにてDVD「真実はどこに？」を鑑賞しました。内部被爆を認めない医学界と、現場の医師たち。どこまでも平行線の討論に、ため息が出ました。

翌日、鰻取りの名人でもある岩本さんの案内で、私にとっては初めての原町区測定でしたが、市街地のポイントが多かったため、私たちを見かけて何人か「いくつ？」と声を掛けて下さいました。私が「0.2~0.3マイクロシーベルトです。」と答えると、「1~2あったのに下がったな」と話してくれ、でもその後に「子どもも孫も戻って来ん」と続けた人も。測定終了後岩本さんのお宅に寄り、趣味の盆栽や陶器を見せてもらいましたが、裏庭に回った時ブルーシートで覆われた山に絶句しました。高線量の土を自ら剥がしたものの、持って行く先がない山。シート上には「さわるな！」の大文字。測定したら、5マイクロシーベルト…近寄れない場所が自宅にあるという現実、その中での日常に胸が痛みました。

3日目鹿島区の測定は、もう顔なじみとなった佐藤さんと同行。ポイントまで通らせてもらった梨の栽培農家は、出荷作業の最中でしたが、将来の不安を話してくれました。

最終日、4月解除後の小高区は丸1年、時が止まったままの街でしたが、半年後の今回も電気だけの復旧で信号のみ点灯し、人影はなし。水が出ない状況で一体何ができるのでしょうか。小高駅構内は、つたか巻きつき駐輪場にはあられた自転車、蜘蛛の巣を張ったまま持ち主が帰るのを待ち続けていました。

最後の訪問地の原発から14km、餓死か殺処分に抵抗し、牛たちを生かす道を訴え続けている吉沢牧場は、柵の付近で2マイクロシーベルト。戦う人たちと彼らを支える支援の輪。

私は憤りとやるせなさと同時に、強いパワーを感じました。

今回で3回目の測定参加となりましたが、松茸に次ぐ地位と言われる猪の鼻茸（いのなたけ）を採ってくれたり、目の前で鮭の遡上を見せてもらったり、回を重ねる毎に地元の人との繋がりも増え、同時に遅々として進まない除染に、地元名古屋と現地との温度差に苛立ちを覚え帰路につきました。



ワールドコラボフェスタに参加して (北奥 順子)

昨年は、一般来場者としてワールドコラボフェスタに参加した私ですが、今年は「チェルノブイリ救援・中部」さんのブースで、ボランティアスタッフとしてお手伝いをさせていただき形で参加し、昨年とは違った深い学びを得る事ができた気がしています。

ブースでは、チェルノブイリと福島に贈るクリスマスカード作りが行われていました。「毎年ここでクリスマスカードを書き、今年もカードを書くのを楽しみに来た」という方も見えましたが、活動の趣旨を聞いて、飛び入りで参加された方も多くいらっしゃいました。しかし、飛び入りで参加した割には、皆さんカードを書き上げるのが早い！みるみるうちにカラフルで個性的なカードが出来上がっていくのです。中には、折り紙やリボンをつけたり、カードに切り込みを入れて立体的に作る方も。思わず「へ～」と言いたくなるアイデアもありましたが、あっという間に出来上がっていきます。きっと、もともと「クリスマス」に対するイメージや思いを抱いているから、いざカードを作るとなった時、それをすぐに形にできるんだな…と思いました。子どもの頃から、クリスマスってわくわくしながら待ちわびてしまいますよね。大人になった今も、部屋にツリーを飾ってみたり、携帯の着信音をクリスマスソングに変えてみたり。歳を重ねて温度こそ変わってしまったものの、楽しみにする気持ち自体は変わりません。名古屋よりも一足早く冬が来る福島はもちろんのこと、海を越えたチェルノブイリの方達も、クリスマスには私達と同じようにわくわくした気持ちを抱いているのではないのでしょうか。離れているけれど、この楽しみにする気持ちを、カードを通じて一緒に味わう。1枚のカードに、クリスマスらしい温かさを感じました。1日終えて、カードでいっぱいになったダンボール箱は、まさにアツアツです。人が人の心を温めることができるという事を、ほっこりと学ぶ事ができた1日でした。ありがとうございました。

フクシマ講座(ワールドコラボフェスタ)に参加して (フロンティア南相馬 伊藤 孝介)



昨年に引き続き、「フロンティア南相馬」として名古屋のワールドコラボフェスタに呼んでいただきました。昨年は、私も理事長の草野も参加していないので、「どんなイベントなのか」「どのように何を伝えたらいいのか」正直迷っていました。震災から1年半が経過している。東電管内の関東地方でさえ、関心が随分と薄まっている中で、更に被災地から遠く離れた名古屋の方々の関心は、どうなのだろうか。また、南相馬に対してどんな印象を持っているのだろうか。一抹の不安はあったものの、それでも私たちは、

テレビや新聞ではあまり報道されなくなった現在の南相馬について、「少しでも知ってもらいたい。耳を傾けてくれる方にだけでも伝えたい」…そう思い、南相馬を出発しました。

私は、今年の夏にも淡路島で、ステージ上にて南相馬の話をさせてもらう機会がありました。その際に「南相馬って、まだ人が住んでるの?」「福島放射線量ってやばいんでしょ?」という声が聞こえました。非常にショックな声ではありましたが、私たちがしっかりと福島の声伝えていかねばならないと気づかされた機会にもなりました。復興どころか、復旧すらまだ終わっていないという福島の現状を、今後長く続くであろう復興を少しずつ進めている福島の姿を、伝えなくてはならない、そんな使命感すら感じさせられました。そのすぐ後に、こうしてまた県外で話す機会をいただけたことは、非常に重要であり貴重であると思っています。今年もお声掛けいただき、貴重な機会をいただきましてありがとうございました。

今回のイベントに先立って、10月6日に名古屋 NGO センターさんと N たまさんたちが南相馬に訪問され、交流を持つ機会がありました。このとき、「名古屋って市民活動が活発なんだな、熱い」という印象を持ちました。この交流があったので、今回少し楽な心持ちで名古屋に行くことができたのだと思います。実際、ワールドコラボフェスタ会場でも、多くの見知った方々に会うことが出来、アウェー感は一切感じませんでした。

16時半からは「チェルノブイリ/フクシマ講座」へ。こんな前で並んで話をするのか。名前まで張り出されて。想定以上に整った会場に少し怯み、テレビカメラがスタンバイしていたことも、緊張の度合いを高める要因でした。会場にはすでに30名ほどの方々が集まってくださり、震災当時の様子や団体の取組事業内容について、お話しさせていただきました。会場からは、「子どもたちの様子はどうか」「仮設住宅での暮らしについて」「風評被害の影響」など、多くのご質問をいただき、それぞれについて私たちの知っている内容をお話しいたしました。会場には、南相馬から名古屋に避難されている方もいらっしゃって、「方言でしゃべれるっていいな」と、話をしてくださいました。「何かしたい気持ちはあるのだが、何を支援したらよいかわからないし、またなかなか動けない」とのご意見も頂戴しました。

正直、地元で暮らす私たちでさえ、何が必要なのかどんな課題があるのか多すぎて、整理できていないのが現状です。それでも目の前で必要とされていること、自分たちに出来ること、自分たちがやりたいと思っていることを、がむしゃらにこなしているだけだと思っています。昨年の震災直後からずっとそうでした。それでも多くの方の支援をいただきながら、なんとかカタチにしてこれたと考えています。

知っていただくこと、応援していただくこと、それだけでも私たちにとってはチカラとなります。そのような気持ちを持っていただいているだけでも、非常にありがたいことです。

一方で私たちは、支援に頼るばかりでなく、自分たちで自立していかなければならないと考えています。しかし、多くの支援や応援の声に励まされながら、私たちは前に進んでいるのだとも実感しています。それに対する感謝の気持ちは、忘れないようにしていきたいと思っています。

名古屋のみなさん、ありがとうございました。そして、またこれからもよろしく願いいたします。

ワールド・コラボと「ウクライナ／フクシマ講座」に参加して

(放射能測定センター・南相馬 森田 雄二)

ワールド・コラボは楽しかったです。

ウクライナ・フクシマ講座は緊張しました。

ワールド・コラボは、残念ながら放射能測定センターのブースがなかったので、出展された NPO フロンティア南相馬さんとチェルノブイリ救援・中部の合同ブースのサポートをしました。また、他の出展団体のブースも見学させてもらい、ワールド・コラボ自体知らなかったのも、とても新鮮で楽しくためになりました。南相馬に戻って、新潟のボランティア仲間の人に連絡したら、何も伝えてないのにワールド・コラボを「ちょうどネットで見ていたところ」と言われ、スゴイ！と思いました。

ウクライナ・フクシマ講座は、カメラも来ていたし、会場前列に指定の席まで用意してあるなんて知らなくて、会場行ったら「えっ！」でした。司会の方から「福島でボランティアするきっかけや経緯を話して欲しい」と言われ、しゃべるのが大苦手なので、正直「もっと前に教えておいてよ！」と思い、あせりました。愛知で話すのは私の本望でもありました。自分が南相馬に行き感じたことを「愛知の方に伝えたい！」とっていました。

講座の参加者をはじめ名古屋に行き(戻り?) フロンティア南相馬の2人のメンバーやチェルノブイリ救援・中部のメンバーとも夜の交流会で出会うことができ、「自分たちを見てくれている人、支えてくれている人たちがこんなにもたくさんいるんだ！」ということを知ることができた機会でもあり、心強くなりました。私たちは1人じゃないんだと。

「ワールド・コラボ」と「フクシマ講座」に参加させて頂いて思うこと。

(放射能測定センター・南相馬 小林 岳紀)

10月に、福島県南相馬市の避難先から名古屋へ車で向かいましたが、道中の景色からは大震災の影響は全く伺えず、名古屋市内は正しく別世界の印象でした。それに比べて、警戒区域が見直され「警戒区域解除準備区域」として立入だけは自由となりましたが、復興に向けた作業が遅々として進まない故郷の現状を思うと、苛立ちを感じざるを得ません。

名古屋で開催された「ワールド・コラボ」では、NGOなどの活動状況が紹介されており、日本国内は言うに及ばず、世界各地での多岐にわたる活動の多さに驚かされました。

それに引き続き、会場を変えて開催された「フクシマ講座」では、パネラー側で参加させていただき、被災当初からの避難過程や、南相馬市で活動していた「放射能測定センター」と関わる様になった経緯などを、話させていただきました。

私事ではありますが、被災直後の混乱した状況の中で、私の長男が愛知県長久手市に居た関係で、長男宅に辿り着いた後、豊田市にある社宅を無償提供され、平成24年1月末まで愛知県での避難生活を送らせていただき、その間、愛知県の支援センターからは、福島の地元紙をコピーして送っていただくなど、色々な支援をいただきました。

福島県南相馬市の仮設住宅へ戻る際に、支援センターへ挨拶に伺った折に、チェルノブイリ救済の会員でもある瀧川さんが、南相馬市での放射能測定マップの為に現地に行くとの事で、南相馬市にて再会しました。この時に私も急遽、計測に参加させていただいたのが『縁』の始まりで、6月1日から『放射能測定センター・南相馬』で測定のボランティアとして活動している経緯を話させていただきました。

「縁は異なるもの」を実感させられるとともに、ボランティアに参加する事で充実した日々を過ごさせていただいており、これからは支援を受ける立場から、地元の一員として自立的に活動してゆく事が大事であると思われる一日でした。今後ともよろしくお願いします。

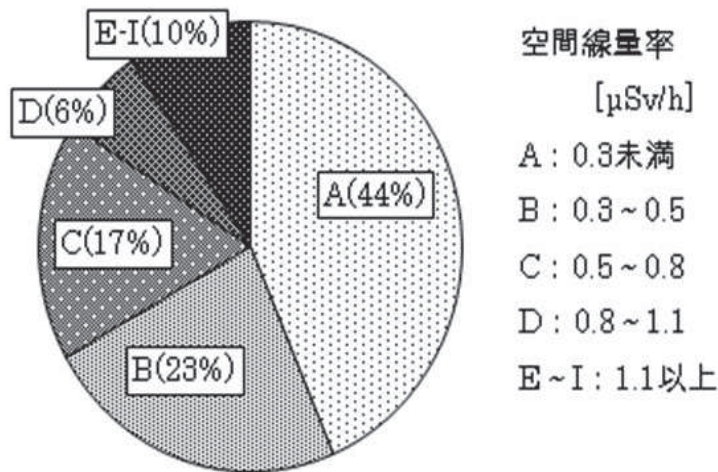


<名古屋おもてなし武将隊
ご一行様 ご来店！>

第Ⅳ期「南相馬市放射線量率マップ」測定結果から

(池田 光司)

第Ⅳ期の測定(10月20・21日,11月3・4日)が終了し、マップが完成しました。前回20km圏内への立入りができるようになり小高区の測定ができましたが、今回はさらに沿岸の津波被災地区の測定が可能となり、ほぼ南相馬市全域のマップを作ることができました。500m四方のブロック数は956と、原発事故から4か月後に行った第Ⅰ期の476(20km以遠の鹿島区,原町区のみ)のほぼ倍となりました。



【図1】第Ⅳ期 空間線量率分布

＜原発事故から1年半経った、南相馬市の空間線量率(地表に残っている放射性セシウムが発するガンマ線の量)はどうなっているのか＞

【図1】に今回測定した放射線量率の分布を示しました。0.3μSv/時未満(年間被曝線量換算1mSv/年未満:A)が44%、0.3~1.1μSv/時(1~5mSv/年:チェルノブイリの第3ゾーン任意移住区域相当:B~D)が46%、1.1μSv/時以上(5mSv/年以上:チェルノブイリの第2ゾーン強制移住区域相当:E~I)が10%という結果になりました。

*年間被曝線量は、自然放射線による被曝量を除いて、屋外8時間,屋内16時間(屋内は屋外の40%)として計算
空間線量率は、後で述べるように予想より早く下がってきていますが、まだ半分以上の地域が年間1mSv(通常時の一般の人々に対するICRP勧告値:これ以下にすることが望ましい値)以上の外部被曝を受ける状態が続いています。

＜空間線量率は、どのぐらいの早さで減っているのか＞

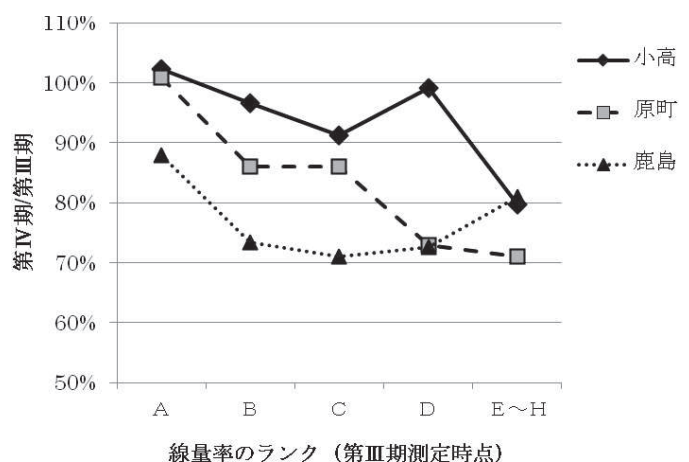
第Ⅰ期から第Ⅳ期まで測定を続けているブロックのデータでは、平均0.85μSv/時から0.43μSv/時とほぼ半分に減っていました。見かけ上の半減期は「1年4ヶ月」となり、理論上の物理的半減期より2.3倍早く半分になりました。

*第Ⅲ期の報告で2.8倍としましたが、GM管で計測される空間線量率のCs134とCs137の比率を間違えており、今回5:5から7:3に見直しました。申し訳ありませんでした。

もう少し詳しく見てみます。第Ⅲ期(半年前)の測定値を100として、第Ⅳ期がどの程度減ったのかを、線量率のランクごとに地区別に見た結果を【図2】に示しました。減衰の大きい順は、鹿島>原町>小高で、各地区とも線量率の高いランクの地域で、減衰が大きい傾向があります。いろいろ要因は考えられますが、もう少し突っ込んだ調査と継続的な調査が必要です。

以上が、空間線量率の状況の概略です。自然減少分と除染効果のバランスを考え、除染計画を見直す時期に来ていると感じます。

測定にご協力いただいたみなさま、ありがとうございました。次回は来春です。



【図2】地区別線量ランク別放射線量率減少状況

————— チェルノブイリの経験を福島に —————

ナロジチ再生・菜の花プロジェクトは、2012年3月をもって5年計画が一段落した。ジトーミル州議会は、私たちのこれまでの活動を評価し、来年から州内でのナタネの大規模栽培（当面500ヘクタール）とバイオエネルギー生産に乗り出す提案を8月に可決した。ウクライナに於ける私たちの役割は果たせた。これまでの多くの方々のご支援に、改めて感謝いたします。5年前、福島原発事故は予想だにできなかったが、皮肉にもこれまでの経験を生かし、汚染地域の復興をしなければならない事態となった。力を合わせて取り組もう。

南相馬の活動から見えてきたこと

昨年4月に初めて福島を訪問し、様々な議論や意見を踏まえて南相馬での活動を開始した。その第一は、市内全域の空間線量率の詳細なマップ作りである。これまでも本誌で度々紹介されてきたが、この1年8ヶ月の間に4回の測定が行われ、4枚の詳細な汚染マップができた。それにより新たな事実が分かった。原発から飛来した放射性セシウム137と134（以下、Cs137、Cs134）の量比は1:1だった。その半減期から計算したよりもかなり早いスピード（2.3倍）で、空間線量率は減少しつつある、という事実である。今では市内の約半分の面積が、年間2ミリシーベルト（mSV）以下である。また、昨年12月に開設し、今年6月から本格的に活動を始めた「放射能測定センター・南相馬（通称・とどけ鳥）」では、住民が持ち寄る野菜や井戸水・土壌などを精力的に測定し、すでに2,000検体を超える分析をした。そこから数々の新たな発見があった。汚染し易い野菜やしにくい野菜がある一方、野菜の汚染は必ずしも土壌の汚染とは直接関係ない（政府の言う移行係数はあまり信頼できない）、という事実である。こうした様々な経験を生かし、外部被曝も内部被曝も、それなりの対策を取れる可能性が見えてきたのである。

福島復興・菜の花プロジェクト

しかし、セシウムは土壌からなくなるわけでないのも事実である。チェルノブイリの経験を生かし、ナタネでゆっくり除染しながら、裏作で食用作物を栽培するプロジェクトを、来年から南相馬で開始する。名づけて「福島復興・菜の花プロジェクト」としよう。この

計画には、南相馬の農家団体（太田地区復興会議、原町有機農業研究会、農業法人 高ライスセンター）や、最近発足した持続可能エネルギー普及を目指す市民団体「エコ&未来エネルギー研究会南相馬」も協力する。2013年秋から7.5畝でナタネ栽培を開始し、順次協力者を増やしていく。放射能を含まない「ナタネ油」は食用油として商品化し、農家の収入とする。そのために、小規模だが搾油工場も建設する。放射能を含む油粕やその他のバイオマスは、ウクライナで行っているように「バイオガス原料」とし、暖房や温室栽培の燃料に利用する予定である。ナタネの裏作には、南相馬での栽培経験がある大豆とヒマワリを栽培する。様子を見て小麦栽培も考える。

農業復興と持続可能エネルギーの連携

この計画の大きな特徴は、汚染地域での農業復興と持続可能エネルギー生産の連携である。メガソーラーは農家の仕事にならないが、バイオエネルギーは農業の継続が前提である。こうした、農業と持続可能エネルギー生産の連携は、勿論、非汚染地域でも可能であり、日本における「農業の復興と原発に代わる新エネルギー生産」という国家目標にも対応する。持続可能エネルギー先進国のドイツでは、農家が運営するバイオガス発電所がすでに5,000基を超え、持続可能エネルギーの約50%を占めているという。

福島復興・菜の花PJは、当面3年間の予定でモデル構築を行う。そのためには約4,000~5,000万円の資金が必要である。

心ある人々の支援を仰ぎたい。（河田）

科目	金額	
I 経常収益		
1. 受取会費		
正会員受取会費	69,000	
賛助会員受取会費	258,000	327,000
2. 受取寄付金		
粉ミルク支援寄付金	56,900	
丸ノ内被災者支援寄付金	530,000	
菜の花プロジェクト寄付金	31,500	
福島原発被災支援寄付金	231,600	
指定なし一般寄付金	3,351,781	4,201,781
3. 受取助成金		
宗教法人真如苑	1,404,000	
三井物産環境基金	1,000,000	
高木仁三郎市民科学基金	250,000	2,654,000
4. 事業収益		
福島支援事業収益	173,700	
啓発事業収益(書籍販売収益)	602,180	775,880
5. その他の収益		
受取利息	1,532	
雑収益	5,320	6,852
経常収益計		7,965,513
II 経常費用		
1. 事業費		
(1)人件費		
給料手当・日当	640,626	
人件費計	640,626	
(2)その他経費		
業務委託費	2,080,099	
支援金	1,910,000	
印刷製本費	632,850	
諸謝金	30,000	
会議費	45,502	
旅費交通費	2,379,300	
通信費	1,100	
荷造運搬	220,302	
消耗品費	8,995	
地代家賃	140,000	
新聞図書費	551,520	
支払手数料	14,645	
雑費	41,750	
為替差損	27,101	
その他経費計	8,083,164	
事業費計		8,723,790
2. 管理費		
(1)人件費		
給料 手当	906,749	
人件費計	906,749	
(2)その他経費		
通信費	57,231	
荷造運賃	45,132	
旅費交通費	1,350	
会 議 費	1,900	
消耗品費	125,371	
印刷製本費	8,686	
地代 家賃	300,000	
租税 公課	700	
諸 会 費	30,000	
支払手数料	35,495	
雑 費	9,460	
その他経費計	615,325	
管理費計		1,522,074
経常費用計		10,245,864
当期正味財産増減額		△ 2,280,351
前期繰越正味財産額		17,369,765
次期繰越正味財産額		15,089,414

※ 今年度は、その他の事業を実施していません。

※ II-1の事業費の区分の詳細は、次ページを参照してください。

財務諸表の注記

1. 重要な会計方針

計算書類の作成は、NPO法人会計基準(2010年7月20日 2011年11月20日一部改正 NPO法人会計基準協議会)によっています。

(1) 固定資産の減価償却の方法

有形固定資産は、法人税法の規定に基づいて定率法で償却をしています。

(2) 消費税等の会計処理

消費税等の会計処理は、税込経理方式によっています。

2. 事業費の内訳

事業費の区分は以下の通りです。

科目	医療支援 機関事業	粉ミルク 支援事業	被災者 支援団体 事業	クリア リスト 事業	菜の花 プロジェクト 再生	業務委託 事業	通信誌 発行事業	イベント 関連事業	駐在員 事業	福島支 援事業 被災者	啓発 事業
(1)人件費											
給料手当・日当					386,626					254,000	
人件費計	0	0	0	0	386,626	0	0	0	0	254,000	0
(2)その他経費											
業務委託費					338,114	354,985			400,000	987,000	
支援金	850,000	510,000	550,000								
印刷製本費				5,400	350		134,715			212,885	279,500
諸謝金										30,000	
会議費										45,502	
旅費交通費					598,920					1,780,380	
通信費										1,100	
荷造運搬費				11,700			206,282			2,320	
消耗品費										8,995	
修繕費											
地代家賃										140,000	
新聞図書費											551,520
支払手数料		820	450		7,870	210				4,750	545
雑費								5,000		36,750	
為替差損	13,189	5,388	8,524								
その他経費計	863,189	516,208	558,974	17,100	945,254	355,195	340,997	5,000	400,000	3,249,682	831,565
事業費計	863,189	516,208	558,974	17,100	1,331,880	355,195	340,997	5,000	400,000	3,503,682	831,565

第14期中間期(2012年度4月1日～9月30日)の会計報告を監査した結果、異常なく正当に処理されていることを証明します。

平成 24 年 11 月 9 日 監査人 **神野 美知江**

昨年NPO法人の会計基準が新しく策定され、2012年度より会計報告書の様式が変わりました。これはNPOの活動をより知ってもらい、どんな活動にお金が使われているのか、また足りていないのかわかるようにしようというものです。今まではひとくくりになっていた事業費が、それぞれの事業ごとに内訳が表示されるようになりました。チェルノブイリ救済・中部でもこの会計基準に則って、今年度より会計報告をさせていただきます。2012年度上半期は、経常費用が1,024.5万円となり、経常収益796.5万円を上回り、228万円のマイナスとなりました。前年の繰越金1,736.9万円から引いて、1,508.9万円が下半期への繰越金となります。(このうち604万円は、固定資産(食品放射能測定器)です。)

今期の収支差額がマイナスとなってしまった要因としては、福島支援事業が活発になっているなか、寄付金あまり集まっていないことが挙げられます。昨年の上半期では、福島支援寄付として290万円、使途を指定しない一般寄付として816万円が集まっていましたが、今期はその4割にも達していません。震災から1年半以上経ち、少しずつ関心が薄れている表れかもしれません。原子力災害は長期の支援が不可欠です。福島でも、これから農地復興のための「菜の花プロジェクト」が始まろうとしています。

今後、啓発・広報活動にも力を入れて、賛同して下さる会員の方を募集してまいります。

活動を安定して行うためにも、皆様からの温かいご支援を心よりお願い申し上げます。(会計担当：兼松)

事務局便り

ウクライナで2007年から展開してきた「菜の花プロ」が終了し、ジトーミル州行政下での大規模化に移行していく。一方、南相馬では、ウクライナで展開した「菜の花プロ」の実証規模の事業を始めようとしている。東電福島第一原発事故以前は、豊かな作物を生み出してきた農地が、放射能に汚染され、失意の中にあっても、しかし決して農業を諦めない生産者が、「汚染されない作物を作るための農地を取り戻そう」と、新たに「福島復興・菜の花プロジェクト」を開始するという。チェル救はその一助になろうと、今年最後の助成申請を2つ行った。事務局では、河田さんの「熱筆」の申請書作成に促され、申請作業を進め終了した。

さて年末は、恒例のカードキャンペーンとミルクキャンペーンを展開している。汚染地ナロジチ地区中央病院の院長は、「入院加療を受ける1歳未満の子どもと、貧困家庭の子どもの為のミルク支援は、必須のものである」と語り、「彼らは、放射性物質により汚染された地域に住んでおり、汚染されていない食品を必要としている」と伝えてきている。「未だにか!」という思いはありつつ、事実として提示された。内部被曝を少しでも減らさねばならない。ミルク支援へのカンパは、年々減ってきている。今一度、ご協力をお願いしたい。(山盛)

クリスマスカード 締切(12月12日)迫る!! — チェルノブイリとフクシマの子ども達へ贈ろう! —

10月に名古屋・栄の久屋公園で開催された「ワールドコラボフェスティバル」で、たくさんの来場者の方々、そして子ども達が、チェル救ブースで展開した「カード作り」に参加してくださいました。

狭いブースで肩触れ合うようにして座り、何も書かれていない紙を前にしてしばし思案顔。でも、一度クレヨンやマーカーを手にするると、皆、マジシャン(!?)に変身。様々な材料を駆使して、瞬く間に素敵なクリスマスカードを仕上げていくのです。ブース内はその出来上がったカードに彩られ、そこだけ早くクリスマス!! どうしてこんなにも手作りのものは暖かみがあるのかと、感心する事しきり。見ているだけで、穏やかで幸せな気分になり、自然と笑みがこぼれます。作る人も届ける人も、そして何より受け取る子ども達が皆、ひと時でもやさしい穏やかなぬくもりに包まれる…。このカードキャンペーンが、何故、20年以上も続いてきたかが、分かるような気がします。カードは、「チェルノブイリを忘れない」「フクシマを忘れない」「ノーモアチェルノブイリ」「ノーモアフクシマ」の思いを載せて、ウクライナへ、そして南相馬へ届けられます。昨年は、ウクライナ税関でのトラブルがありましたが、今年は万全の態勢で送り届けます。まだ、書いていないあなた! 是非、一枚のカードをお寄せください(12月12日締切)。また、カードの発送作業をお手伝いして下さる方、募集中です。



作業日は事務所にお問い合わせください。

(山盛)

編集後記

☆ボルシチ作りに欠かせないピーツ、近所のスーパーで1個498円で売っていた!小牧さ〜ん!! (佳)
☆年の瀬に、またまた公私ともに慌ただしくなってきた。どんな場合も落ち着いて対応しなくちゃ。(美)
☆オバマ再選で、ヒラリー・クリントンやペトレイアスCIA長官が失脚。旧支配勢力の逮捕・更迭が加速している。日本においても、その外圧勢力の交代による政変が、今起きようとしている。12月16日の衆院選は、「脱原発・反消費税増税・反TPP」がわかりやすいキーワード(第4極=真の対極)となり、第1極~第3極(民・自・公・維新)を追いつめている。マスコミの世論調査捏造に惑わされることなく、あなたの信念に基づく一票を! (J)

〒456-0022 名古屋市熱田区波寄町 20-14
印刷「エープリント」
TEL・FAX (052) 871-9473